

令和 5 年 6 月 2 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18H00925

研究課題名（和文）ポスト成長期における先進産業地域の持続可能性とまちづくり

研究課題名（英文）Advanced Industrial Region and Community Building in Post-Growth Period

研究代表者

丹辺 宣彦（Nibe, Nobuhiko）

名古屋大学・環境学研究科・教授

研究者番号：90212125

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 8,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、コロナ禍の影響を受け実施時期の変更や中止を余儀なくされた調査項目もあるものの、期間中に予定していた主要調査、すなわち四日市市住民向けの質問紙調査とまちづくり団体・企業へのインタビュー調査をおこなうことができ、豊田市の第三次質問紙調査を実施することができた。これらのデータをもとに「地縁性」に注目し、先進産業都市・地域の社会構造・住民意識・集合行為と持続可能性に関する分析をさらに進展させた。これらを通じて、シカゴ派も新都市社会学もとらえることができなかった先進産業都市・地域の特徴を示すことができた。またその過程で、中国・南京大学および東南大学との研究交流も進展させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究を通じて、経済のグローバル化と人口構造の変化が、先進産業地域の社会構造、住民意識、集合行為に及ぼす影響を実証し、開発と定住の経緯を踏まえた生活環境とまちづくりの関係を示した。理論面では、長期間発展した産業都市で「規則的/規制された」動的密度が高くなり、地縁性の高い公共空間が実現しうることを示した。これにより、シカゴ派的都市論やマルクス派の階層分析とは異なる新たな地域研究の視点も提示することができた。これらの地域では、非通念的な市民文化を移植するだけでなく、格差拡大と閉鎖性を抑えながら地縁的・通念的な価値を更新し、住民間の合意を得ながら市民活動を活性化する方途も有効であることが示唆される。

研究成果の概要（英文）：Through this research project, we have successfully accomplished a survey/interview research in Yokkaichi City, and the third time survey research in Toyota City, whereas a part of the scheduled plan was delayed or cancelled because of covid-19 pandemic. Because of the research data and the subsequent analysis we were able to specify more about the 'community-based' characters in social ties, consciousness, and various collective actions of the residents; caused by the stable employment and residence. However, the past privileged situation is gradually changing due to the strengthening of global competition and demographic changes in Toyota. Most Environmental activities are also driven by community-based groups in Yokkaichi. Thus, the unique character of the advanced industrial cities/regions is explained from the theoretical point of view as well, which has been almost overlooked by the Chicago School urban sociology and the Marxian new urban sociology.

研究分野：社会学

キーワード：産業都市 集合行為 社会的ネットワーク グローバル化 生活環境 まちづくり

## 1. 研究開始当初の背景

経済活動がグローバル化するなかで、先進的な産業都市(圏)の動向・盛衰は国家的にも重要な意味をもつ。産業が衰退することが多い先進国の都市・地域だけでなく、製造業の世界的センターとなっているアジアの都市・地域の今後にとって、産業と地域の関係、サステナビリティは理論的・実証的に重要な研究課題となっている。

にもかかわらず、都市社会学・地域社会学の既存パラダイムの死角に入り、この研究課題は十分に研究されていない。都市研究が、シカゴ学派とこれに対抗する潮流から展開されてきたことはよく知られている。しかし発展した産業都市の地域構造、住民意識、集合行為を分析しようとすると、シカゴ派の枠組でも、新都市社会学の発想を用いてもうまく分析できないことが多い。これは、シカゴ派が産業の枠組を適切に取り込んでいないこと、また新都市社会学も、階級対立や都市危機状況に注目するあまり、産業が発展した都市の問題を適切に扱っていないためである。特に日本の工業地域については、開発段階の諸問題を批判的にとらえるのに適していたマルクス派(構造分析)の調査研究が非常に多かったが、分析枠組・視点が柔軟性を欠いており、その後の成長期・成熟期の地域の変化や発展、存続可能性を適切にとらえた研究は少なかった。

このような状況を受け、研究代表者のグループは数次の科研調査プロジェクトによる量的・質的調査を自動車産業が集積する豊田市、刈谷市で実施してきた。これにより、安定した雇用と移動の少なさを背景に中流型の階層構造・近代家族的な性別役割がみられ、来住者でも地域的紐帯が強くなっており、地縁型のまちづくり参加が活発になっていることを見出した。

## 2. 研究の目的

以上を踏まえ本研究は、豊田市、四日市市等を主な事例とし、開発の経緯と立地産業の構造転換を前提とし、グローバルな展開と人口学的・社会的変化をとらえながら、ポスト成長期の地域社会の構造・住民意識・集合行為の特徴について明らかにする。これにより地域の特質と諸課題をとらえ、持続可能な都市形成・生活環境・まちづくりの特質と可能性を示そうとするものである。このような作業を遂行しながら、理論的には欧米一辺倒の観点を脱して都市の多系的発展の可能性を示し、日本の産業都市・地域だけでなく、ものづくりの世界的中心地域となつてすでに久しいアジアの諸都市にとっての研究指針を引き出すことを企図する。

## 3. 研究の方法

本研究では、四日市市住民、豊田市住民向けの質問紙調査をおこない、あわせてまちづくり団体・企業へのインタビュー調査をおこない、地域構造・住民意識・集合行為の特徴を明らかにする。量的調査を主、質的調査を従とするのは、両都市がトヨタ自動車や公害という価値判断を招きやすいトピックを抱えているのでできるだけこれを避けるためである。

豊田市については前科研までの作業で、自動車産業従事者の地域的紐帯が強く、地縁型まちづくりへの参加が活発なことが明らかになっているが、グローバルな競争の強まりと、未婚化・少子化・高齢化などの人口学的・社会的な変化がどのような影響を与えているかを分析することが課題となる。四日市市については、工業開発の経緯が現在の生活環境になお影響を及ぼしているのか、あるいはそのことが環境まちづくりにどのような影響を及ぼしているかが研究課題となる。

四日市市については、生活環境とまちづくりをテーマに、市内全域の25-74歳の住民を3000人無作為抽出して質問紙調査をおこない、自治会・まちづくり団体・企業など関係団体にインタビュー調査を実施する。質問紙調査については2019年8月に無事実施できたが(有効回収率38.1%)、その後予定していたインタビュー調査についてはコロナ禍で対面調査が困難になったことから、2022年夏以降ようやく実施することができた(26団体・企業)。

豊田市については、2009年、2015年に続き、旧市内に居住する25-74歳の住民3000人を無作為抽出して第三次の質問紙調査をおこない、時系列比較をおこなう。2015年調査では地域紐帯とまちづくり参加が停滞したため、その原因を解明しつつ、その後の趨勢について分析をおこなう。当初は2020年8月に実施する予定であったが、コロナ感染の拡大により、再三延期を余儀なくされ、最終的には2022年8月ようやく実施することができた(不達票を除く有効回収率は40.4%)。

## 4. 研究成果

調査から得られたデータをもとに分析と検討を重ね、専門書(うち1冊は英語への翻訳版)、多くの論文等を刊行し、さまざまな学会で報告を行った。これらを通じて、先進産業都市・地域の特徴・現状の分析をさらに進展させることができた。

豊田市では経済活動のグローバル化と人口構造の変化が、それぞれ格差拡大と社会的ネットワークの縮小を通じて、つよかった地域的紐帯とまちづくり活動への参加をとくに周辺のグループで弱めている因果関係を実証的に示すことができた(図1)(丹辺・中村・山口編2020)。

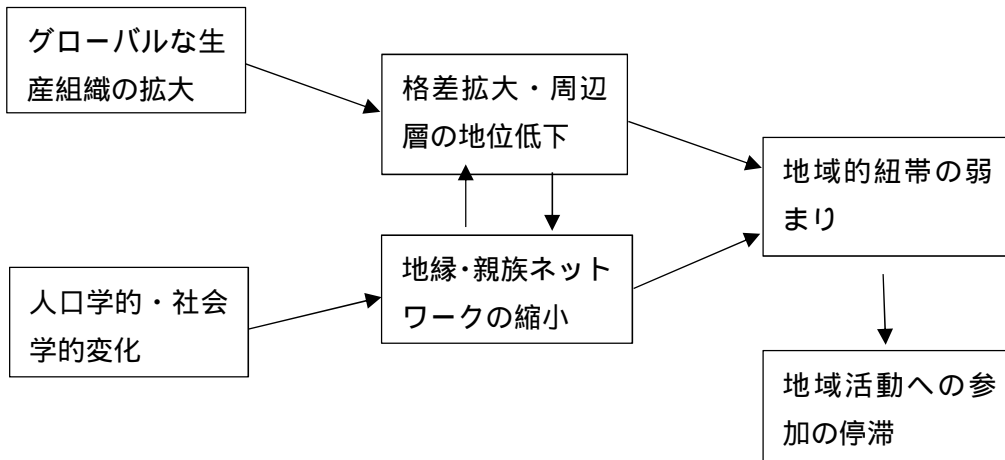
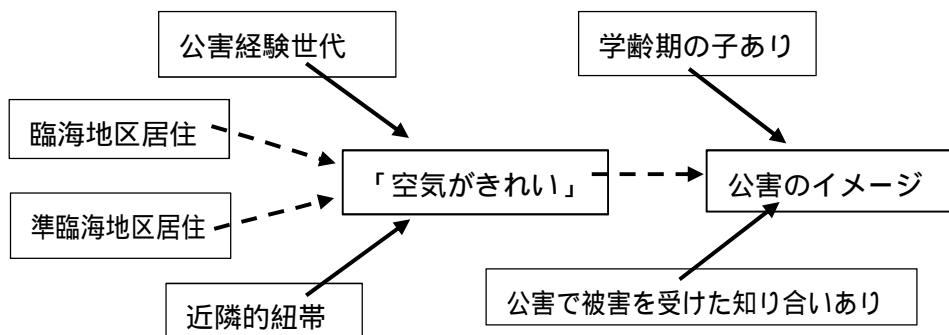


図1 豊田の地域秩序を動揺させる諸要因(丹辺他(2020)による)

2022年の質問紙調査データからは対面的接触をとまなう近所づきあい、まちづくり活動参加がある程度減少していたが、全体としては2015年調査と比べて地域交流に目立った停滞はみられず、若年層の参入もみられた。そうしたなかで大きな落ち込みがみられたのが、中高年女性の地域活動参加である。これは、夫の就業先とは無関係に就業し続ける/再就業する女性が増え、家事と仕事に追われ社会活動をする余裕がなくなっているため、また男性中心の地域秩序を忌避しているためと考えられる(丹辺編 2023)。

トヨタ自動車・関連企業については、無作為抽出による量的調査をもとに就業者たちの雇用と仕事の実態を明らかにした調査研究は極端に少なく、価値判断交じりの称揚や批判に傾きがちであった。本研究ではその調査特性を生かして、この点の比較・検討に着手した。トヨタ自動車従業員の技能レベルが他に比べて高く上昇し続けること、トヨタイズムの価値観がじっさいに検出できること、関連企業の従業員と働きかたにかなりの違いがみられること、など興味深い知見が得られているので(丹辺 2023)、2015年のデータと併せて今後も検討を続けたい。

四日市市についても、製造業の安定した雇用と、定住性の高さが、地域的紐帯とまちづくり参加を促進していることが確認されたが、同市については、開発と公害の経緯が現在もなお生活環境と地域イメージに影響を及ぼしていることも確認された。市に対する公害のイメージは臨海部でなお高く、それが「空気のきれいさ 汚さ」という身体的知覚とともに、近隣の紐帯をはじめとする様々な社会的要因によって規定されていること(図2)が明らかになった(丹辺・三田・高 2021)。関連して、学齢期の子をもつ若い家族が内陸部に移住すること、地域のイメージを改善する意欲をもつ人が環境まちづくりに参加する傾向がみられた。総じて、地縁性のつよさが環境の評価や環境まちづくりへの参加にまで影響を与えているという興味深い知見が得られた。



5%水準で有意な効果のみ記載・破線矢印は負の効果を表す

図2 四日市市：公害のイメージを規定する生活環境要因(丹辺他(2021)による)

理論面では、長期間発展し階層格差が比較的小さい産業都市で「規則的/規制された」動的密度が高くなり、地縁性の高い公共空間が実現しうることが示された(図3)。シカゴ派第一世代が見落としたデュルケムの分業論の発想に着目し「都市度」の対極に「規則的/規制された」動的密度を設定することで、「無規則的/逸脱的な」動的密度という概念との間に、量的移行関係を確保しながら質的な違いをみてとることができるようになる。またこうすることで、地方の工業都市や村落共同体を、「都市度」がたんに欠如した状態ではなく、積極的な特性をもった社会的空間としてとらえ直すことができる(丹辺 2022)。

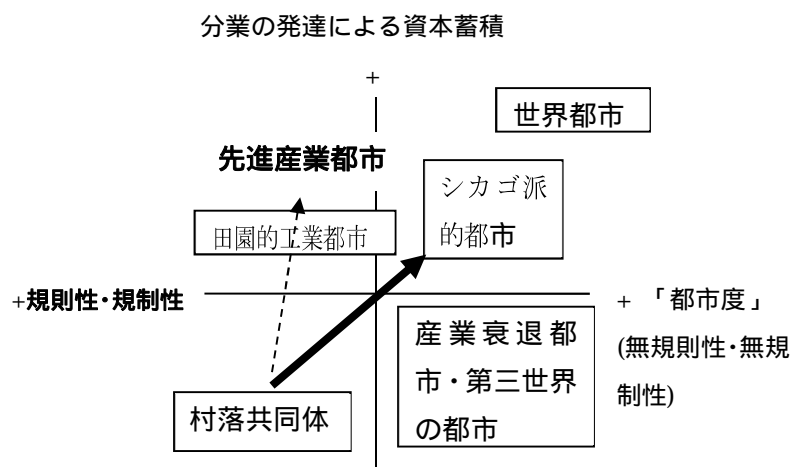


図3 都市化の類型(丹辺(2022)による)

これにより、シカゴ派的都市論やマルクス派の階層分析とはまた異なり 経済的・社会的ネットワークの活用可能性と閉鎖性によりアクターの階層的地位が規定されるという 新たな地域研究のパースペクティブも提示することができた。これは、ヴェーバー派の集団閉鎖論を、ソーシャル・キャピタル論と接続する意味合いをもち、階層論にも寄与しうるアイデアである。実践的には、非通念的な市民文化を移植するのではなく、格差拡大と閉鎖性を抑え、地縁的・通念的な価値・テーマにもとづいて更新し、住民間の合意を得ながら市民活動を活性化していくやりかたが有効であることを示すことができた。

国際的な研究の発信としては、*Toyota City in Transition: A Motor Town facing Globalization and Social Changes*を Springer Nature 社から刊行できたことが大きい。研究を進める過程で、中国・南京大学および東南大学との研究交流も進展させることができた。南京大学の現代日本社会研究の講義シリーズとその出版企画には研究代表者も本研究に関連して参画している。コロナ禍と政治情勢により中断を余儀なくされたが、今後も研究交流を続けていきたい。

#### 文献

- 丹辺宣彦, 2022, 「都市空間と二つの『動的密度』 分業と都市度の関係: 工業都市圏の地域特性をめぐって」『東海社会学会年報, 14, 66-80.
- 丹辺宣彦・鈴木健一郎・Song Gi Jung, 2023, 「トヨタ従業員の働きかた(上) 2022年豊田調査データからみる就労状態と価値志向」『社会学論集』, 44, 1-19.
- 丹辺宣彦編, 2023, 科学研究費成果報告書『「豊田市のまちづくりと市民活動に関する調査 コロナ禍に向き合う地域社会」』(基盤研究(B): 研究代表者 丹辺宣彦), 95.
- 丹辺宣彦, 中村麻理 山口博史編, 2020, 『変貌する豊田 グローバル化と社会の変化に直面するクルマのまち』, 東信堂, 283.
- 丹辺宣彦・三田泰雅・高娜, 2021, 「開発・公害の経験と産業都市の生活環境 三重県四日市市の地域イメージをめぐって」『東海社会学会年報』, 13, 103-117.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 5件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 丹辺宣彦・鈴木健一郎・Song Gi Jung	4. 巻 43
2. 論文標題 トヨタ従業員の働きかた（上） 2022年豊田調査データからみる就労状態と価値志向	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 名古屋大学社会学論集	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹辺宣彦	4. 巻 14
2. 論文標題 都市空間と二つの「動的密度」 分業と都市度の関係：工業都市圏の地域特性をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 66-80
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹辺宣彦・三田泰雅・高娜	4. 巻 42
2. 論文標題 四日市市における就労・移動・定住化とまちづくり(下) 住民の生活環境と集合行為をめぐって	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋大学社会学論集	6. 最初と最後の頁 87-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 丹辺宣彦・三田泰雅・高娜	4. 巻 13
2. 論文標題 開発・公害の経験と産業都市の生活環境 三重県四日市市の地域イメージをめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 103-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 丹辺宣彦・三田泰雅・高娜	4. 巻 41
2. 論文標題 四日市市における就労・移動とまちづくり(上) 開発の経緯と都市軸をめぐって	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 名古屋大学社会学論集	6. 最初と最後の頁 37-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 丹辺宣彦	4. 巻 40
2. 論文標題 Toyota Employees' Commitment to Work and The Local Community	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The Sociological Review of Nagoya University	6. 最初と最後の頁 1-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 丹辺宣彦・ハヤシ・ブルーノ・渋谷努	4. 巻 39
2. 論文標題 豊田市保見団地における日系ブラジル人定住層のネットワーク形成と集合行為 二つの生活世界の間をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 名古屋大学社会学論集	6. 最初と最後の頁 25-50
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 丹辺宣彦・ハヤシ・ブルーノ	4. 巻 11
2. 論文標題 豊田市保見団地における日系ブラジル人の定住化と就労 自動車産業就労をめぐるネットワーク形成と「半周的地位」を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東海社会学会年報	6. 最初と最後の頁 40-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 高娜, 丹辺宣彦
2. 発表標題 城市発展、汚染治理与居民生活：日本産業城市四日市市的事例, “大都市的治理与参与”
3. 学会等名 暨紀中日国交正常化50周年国際學術研討会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丹辺宣彦
2. 発表標題 三大都市圏における格差拡大の進行過程とその社会的帰結に関する研究(6)：大都市公共圏の階層性と社会関係資本の機能
3. 学会等名 日本社会学会第95回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丹辺宣彦
2. 発表標題 三重県四日市市の生活環境課題とまちづくり 地域秩序と市民 活動をめぐって
3. 学会等名 地域社会学会第46回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 三田泰雅・丹辺宣彦
2. 発表標題 ポスト産業化時代の産業都市 三重県四日市市の就労・移動と家族形成
3. 学会等名 日本都市社会学会第38回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 丹辺宣彦・高娜
2. 発表標題 産業都市四日市の都市形成と現在 環境意識・地域イメージにみる開発と公害
3. 学会等名 日本都市社会学会第38回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Nobuhiko Nibe
2. 発表標題 Aging Tigers: Restructuring of Old Industrial Cities in East Asia (International Workshop)
3. 学会等名 Toyota City and TOYOTA Workers: The challenges and sustainability of the global industrial city (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹辺宣彦
2. 発表標題 地域社会における階層形成とネットワーク効果 階級論とネットワーク論の交錯関係をめぐって
3. 学会等名 地域社会学会第44回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 丹辺宣彦
2. 発表標題 階級論における「搾取」と「閉鎖/排除」 メタ・ネットワーク論からみた交錯関係をめぐってー
3. 学会等名 東海社会学会第11回大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 中村麻理
2. 発表標題 豊田市の新たな新規就農者ネットワーク 農と福祉の連携に注目して
3. 学会等名 東海社会学会第11回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 Nobuhiko Nibe, Mari Nakamura, Hiroshi Yamaguchi	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Springer Nature	5. 総ページ数 235
3. 書名 Toyota City in Transition: A Motor Town Facing Globalization and Social Changes	

1. 著者名 丹辺宣彦・中村麻理・山口博史・渋谷努・中根多恵・ハヤシ ブルーノ	4. 発行年 2020年
2. 出版社 東信堂	5. 総ページ数 279
3. 書名 変貌する豊田ーグローバル化と社会の変化に直面するクルマのまち	

1. 著者名 丹辺宣彦(庄司興吉編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 186
3. 書名 21世紀社会変動の社会学へ 主権者が社会をとらえるために	

〔産業財産権〕

〔その他〕

名古屋大学社会学講座ホームページ教員紹介欄（丹辺宣彦・調査報告）で成果の一部を公開  
<https://www.social.env.nagoya-u.ac.jp/sociology/faculty/report>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	中村 麻理  (Nakamura Mari)  (60434635)	名古屋文理大学・健康生活学部・教授    (33933)	
研究分担者	三田 泰雅  (Mita Yasumasa)  (30582431)	四日市大学・総合政策学部・教授    (34103)	
研究分担者	山口 博史  (Yamaguchi Hiroshi)  (70572270)	徳島大学・大学院社会産業理工学研究部（社会総合科学域）・准教授    (16101)	
研究分担者	中根 多恵  (Nakane Tae)  (10774515)	愛知県立芸術大学・音楽学部・准教授    (23902)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

中国	南京大学	東南大学	吉林大学	
----	------	------	------	--